

「駅」と短歌

― 集団を求める孤独と集団の中の孤独 ―

磯川 朋美

ネット上で「駅名短歌」が一時期話題になった。隣り合う駅名を繋げて読むと短歌のリズムになるというもので、例えば東京メトロ東西線の「東陽町とうやうちよう→南砂町みなみすなまち→西葛西にしからい→葛西かさい→浦安うらやす→南行徳みなみぎょうとく。初句こそ字余りだが、なるほどと頷かざるを得ない見事な定型である。全国から様々な「駅名短歌」が寄せられ、関西では関西本線の「郡山こおりやま→大和小泉やまとこいずみ→法隆寺ほつりゅうじ→王寺おうじ→三郷さんきょう→河内堅上かわちかたかみ」が有名である。駅名を覚えるのに便利だが、気持ちのいいリズム、日本人ならつい声に出してしまう、といった短歌の五七五七七のリズムに好感を持つ意見も多く、また短歌は本来声に出して読むという基本が図らずも指摘されており、未だ短歌は日本語を母語とするものの潜在意識に息づいているのだな、と嬉しくなる話題であった。

さて、駅名短歌はその音のみを採用して作られているが、本来の短歌で駅という単語や駅名を詠み込むとすればたいいてい歌中に一つで、そこには作者の深い意図が込められる。

一、「駅」を詠み込んだ初期の短歌

駅を詠み込んだ短歌で初期の作として真っ先に思い出されるのは、石川啄木の

ふるさとの訛なまじなつかし
停車場ていしやばの人ごみの中に
そを聴ききにゆく

である。一九一〇年刊行の『一握の砂』に収められたこの歌の「停車場」とは、上野駅とされている。一九〇五年に上野―日暮里間を複々線化、線増して東北本線と常磐線がそれぞれ乗り入れ、一九〇九年には電化、線増された山手線も乗り入れるようになった当時の上野駅は、多くの人で賑わい活力と活気に満ちていたに違いない。しかしこの短歌を初めて知った時、私は「大きな駅の喧噪のなか、郷里の言葉聞き分けられるものだろうか」と思った。一八八三年七月二十八日に開業した上野駅は、今年二〇二三年をもって開業一四〇周年を迎えた。私が先日訪れた上野駅の喧噪は凄まじく、親子連れや若者、回復し始めた海外観光客などでごった返し、そこに各線の発着アナウンスやキャンペーン・乗車マナーを促す放送やそれに伴う音楽、また盲人誘導チャイムや駅ナカ店舗から流れる音楽や呼び込み等、うねるような音で満ち溢れ、人々の話す言葉が聞き取れる状況ではなかった。

夜の駅にももの売る声の冴えとほりみづから

の声をたのしむごとし

上田三四二『黙契』（55年）

当時まだ京都に住んでいた上田の詠んだ「夜の駅」はどこであったか定かでないが、夜になっても物売りがあるとすれば京都駅等ある程度大きな駅であろう。駅を行き交う人々に声を張り上げ物売りの商売人の生き生きとした様子。そこで詠われているのは人間が感じる労働の喜びである。そしてここで気づくのは、声である。啄木も上田も、駅で人々の声を聞き取っていた。思うに、今のようになアウンスや音楽が始終流れてはおらず、発着を知らせるベルのけたたましい音と怒鳴りあうような声に満ちていたのではないか。人間の生々しい声が満ちている存在を思うと、それは街に現れた大きな生命体のようにも想像できる。

駅構内に古りし枕木積まれありかかもの
らも早にかわく

長澤 一作『雪境』（75年）

枕木の交換は十年から二十年といわれるが、長年列車の重みと振動に耐えて古びた枕木が交換のち放置され、さらされるままに乾き風化していく様を、長澤は「かかものらも」と心情を寄せ、働き疲れた人間に重ね合わせるようである。

このようにみていくと、初期の、駅を詠み込んだ歌は労働と縁が深い。そもそも鉄道とは産業発展に伴う輸送機構の確立が原点であり、人間の労働と歩を合わせるように発展してきた。啄木が上野駅に求めた郷里の人々は東北本線から流れ込む労働力であり、上田が詠んだ物売りの声は、夜遅くまで

物を買って買いついて働く日本の労働者の姿そのものである。

二、労働の象徴からの変化

駅が短歌のなかで労働の象徴から少しづつ離れ、その意味合いを変えてきたのはどのあたりからだろうか。

今しばし死までの時間あるごとくこの世に

あはれ花の咲く駅 小中英之『翼鏡』（81年）

蛍田てふ駅に降りたち一分の間にみたざる

虹とあひたり

小中が駅で見たものは、花と虹であった。どちらもそう大きな駅ではないだろう。花は生の象徴であると同時に生のある死の予感である。降り立った蛍田駅では気まぐれに空に表れる儂い虹を見た。これまでの人間臭さや喧噪とはかけ離れ、小中の駅は静謐で、時を司る場とでも言おうか、しばし立ち止まり人間に大きな時の流れを垣間見させる存在である。時は高度経済成長期を経て好景気、一九七五年には山陽新幹線が開通、一九八二年には東北新幹線大宮―盛岡間、上越新幹線大宮―新潟間が開通し、それに伴って在来線の駅も混雑を極めていただろう時代に、小中は敢えて鄙びた駅で、もっと大きな時の流れを見つめていたところに特徴がある。そしてこの頃から駅という語は人生的、精神的な意味合いを持って詠われることが多くなる。

三、人生の舞台としての現代の「駅」

この世にぞ駅てふありてひとふたりあひに
しものをみずかなりなむ

山中智恵子『星肆』（84年）

駅とは人の交錯するところであるが、山中の歌を、駅で人は出会うものだがやがて会えなくなってしまうだろうと単純に読むことはないだろう。人生、その人が背負う時間、そのようなものが交錯した場が駅であり、そしてむしろ実在の駅であるかも知然とせず、人生でふと立ち止まる一場面の象徴と読むことも可能である。

いつもより一分早く駅に着く 一分君のこと
と考える 依 万智『サラタ記念日』(87年)

何かの拍子でいつもより少しだけ早く駅に着いた。電車の到着までおよそ一分間。僅かな時間に「一分」と区切りを持たせたのが秀逸だが、相手を思う真剣さと思いの深さが込められる。駅で過ごす時間は無意識に過ごしてしまいがちだが、そこに相手を思う時間が割り込んできたところに湧き上がる恋心が読み取れる。

駅の椅子に惚け寝る男人生がああああ垂れ
る駄目だ終りだ 岩田 正『いつも坂』(97年)

コロナの世を経て駅でこのような事態を見ることは減ったが、それでも情景は容易に想像できる。下の句を読めば大方の読者も「ああ終わりだ」と同調せずにはられない。(しかし、岩田の軽い詠みぶりにより、絶望だけではなく希望も感じるのである)。働いて気を遣って飲みすぎて、疲れ果てて擦り切れたある男の人生だ。しかしこの男が寝る椅子が駅でなければどうだろう。自宅や職場、病院の待合室の椅子などでは、やはり男の背負ってきた人生の重みにちょうどいい具合にならない。電車の椅子だと同じような解釈ができるが、

駅と電車の密接な関係を思えば納得できる。

「まもなく」のアナウンスあり「まもなく」は電車にあら^{そが}背向より来る

小高 賢『本所両国』(00年)

駅の語はないが、この短歌の生まれた場は駅であろう。ホームでの「まもなく、1番ホームに」のアナウンスが、ふと電車ではなく人生のもっと大きなもの、例えば人生にあるという三つの坂「上り坂・下り坂・まさか」の、まさかに対応するものの訪れを予告するのだ。それは背後からふいに、いやむしろ予定されていた正確さで訪れるのである。

ついてゆきたいほど寂しげな少女ひとり駅
の雑踏に細りて消えつ

河路由佳『百年未来』(00年)

集団とは一定の顔を持つが、朝の駅の集団は忙しくなく夕方は騒々しく賑やかだ。そんな駅の雑踏のなかで浮いた雰囲気を持つひとりの少女に気づいた河路もまた、その寂しさに共鳴する心を抱えていたに違いない。このように読めばその少女は河路の少女時代にも重なって見えてくる。そして駅は単なる雑踏ではなく、時空の交錯する場となるのである。

しかし実際、我々はこの世の他のどこへも行けはしない。

さびしさよこの世のほかの世を知らず夜の
駅舎に雪を見てをり 河野裕子『歩く』(01年)

霏々として降り続く夜の雪を見つめる河野の真剣さは、この体の一度きりの人生を全うせねばならない、今生の重さと寂しさと孤独である。田舎の駅でも都市部の大きな駅でも、

河野のさびしさは和らぐことはないだろう。

「次は日没、日没です」と聞こえはいづ

くの駅か再び眠る 花山多佳子『木香薔薇』(06年)

日本人は電車でよく寝るといいますが、再びというからには花山も車内で寝ていたのであろう。車内アナウンスの声で起きたが、それは「次は日没、日没です」などと言う。そんな駅あつたかしらと思いつつ、また眠ってしまった。もちろん聞き間違いだらうが、日没を司る駅があつて作者は時をかける電車に乗っているような、想像の自由をかきたてる歌である。

この駅は我が人生の通過点いつも乗り換えばかりしてゐて

佐田公子『過去世のかけら』(07年)

人生の変化の中にあつても、いつもこの駅で乗換えをしているな、という駅がある。利用路線を変えたり、鈍行・急行の乗換えをしたりと過不足なく選択してきたが、果たして人生の方は真の目的に近づいているのか、徒に乗換えを繰り返して消耗しているだけではないのか、自問するのである。

四、集団の中の孤独と、孤独の中から求めるもの

このようにみてくると、現代短歌で駅とは、立ち止まったり通過したりしながら、時の流れを思い、人生の越し方行く末に思いを巡らせる格好の場として提供されている。移動という時間に関わる場であると同時にそれ自体が目的地になることは稀であり、加えて老若男女が集えども止まらず深く交わりもしない駅という存在は、川や風など流れることによつて人生に重ねられる言葉と同様の捉えられ方をしつつも、よ

り人間味あふれる解釈がなされている。

そして沢山の人が集まる駅にあつても、ひっそりと佇むのが歌人のようである。

冬の駅ひとりになれば耳の奥に硝子の駒を置く場所がある

大森静佳『てのひらを燃やす』(13年)

大森は、個人の非常に繊細な心の底を詠つてみせたが、二句の「ひとりになれば」は駅の雑踏の中でふと孤独を感じたのか、本当に人の流れが途切れてひとりになったのか、あるいは仲間と別れてひとりになったと読むのか解釈が分かれるが、いずれにしろ痛いまでの孤独な内省は本来人の集う駅が舞台となった。これまでみてきた現代の歌人も同様の立場であり、前提に孤独がある石川啄木や上田三四二が人の集まる駅に生き生きとした人々を求めたのとは逆の視点である。

集団の中の個の確立と充実は現代の多くの場面での課題であり、学校や家庭、地域社会や会社の中でも我々は自己に無自覚無防備であつてはならず、個性の尊重が大前提である。現代日本の人口減少や昨今のコロナ社会の生活様式も加わり、この傾向はますます加速していきそうである。鉄道や駅の利用もリモートワークの普及なども影響して、今後は全体として縮小していくことだろう。駅員も不在で電子音やアナウンスばかり響く人影まばらな駅となつたとき、歌人は駅に何を詠うだろうか。再び人を求め人の声を探す歌も出てくるのであろうか。